

アメリカにおける人文系宗教学の制度的位置 ——「神話と儀礼」としての「宗教」概念の由来——

藤原 聖子

はじめに

本科研の研究会の初回に、メンバーにほぼ共有されていたこととして、アメリカの宗教学は、制度的にも内容的にも日本のそれにかなり近いだろうという予想があった。邦訳される研究書、話題になる研究者も、近年になるほどアメリカの宗教学のものが増えている。情報量が多く、認知度が高いということである。

本稿は、そのアメリカの宗教学が、実は非常に基本的なところで意外な特徴を持っているということを指摘する。それはほかならぬ「宗教」概念に関する特徴である。宗教学で（さらには一般社会で）使われてきた「宗教」概念は西洋近代的・プロテスタント的であるということが、前世紀から続く「宗教」概念批判の共通理解となっているが、欧米諸国の宗教学の「宗教」概念もまた決して一様ではない。もちろんこれは、「宗教」の定義は研究者の数だけあるという意味ではなく、アメリカ宗教学には特有の「宗教」のとらえかたがあるということである。

なお、以下に取り上げるアメリカの主要な宗教学会である AAR (American Academy of Religion) や NAASR (North American Association for the Study of Religion) は、合衆国だけでなくカナダを含んでいる（さらに NAASR にはメキシコも入る）。だが、本稿はアメリカとカナダの宗教学の異同には踏み込まず、射程をアメリカに限定する。

1. 「宗教」は「神話」と「儀礼」から構成される

「宗教」概念に関するアメリカ宗教学の特徴を端的に表す例として、AAR の学会賞を挙げたい。この学会賞は現在、「分析的—記述的研究」「構築的—反省的研究」「歴史的研究」「テキスト（聖典）研究」の4部門に分かれている¹。「構築的—反省的研究」は、宗教哲学・倫理学、神学を指し、「歴史的研究」は「〇〇教史」と括られる研究、「テキスト研究」は聖典類の文献学的研究に該当する（日本でいえばインド哲学・仏教学の中心を成すような研究）。残る「分析的—記述的研究」が、狭義の「宗教学」になる。すなわち、宗教哲学・神学でもなく、個別宗教史でもなく、文献学でもない宗教研究ということだ。

これは一見すると日本でもなじみの分類である。すなわち、日本宗教学会の第1部会（学会内部の者に、典型的な宗教学と見なされている宗教学の理論や方法論の部会）が「分析的—記述的研究」に該当するよう見えるし、インド哲学・仏教学と宗教学内の仏教学研究の違いを説明するときは、前者は伝統的に文献学が中心で、後者はそれ以外のアプローチを含み、かつ比較の視点を伴うなどと言う。

ところが、AAR による「分析的—記述的研究」の説明は、おそらく日本の宗教学者の多くに違和感を抱かせるものである。

宗教に対する分析的—記述的研究とは、研究対象として宗教に焦点を当てるか、または神話、儀礼、伝統などの宗教の典型的な構成要素に焦点を当てた、分析的ないし理論的研究である。

(強調筆者)²

「宗教」という単位で分析してもよいし、宗教の中の特定要素を分析してもよい、というところはわかる。不可解なのは、なぜその典型的要素が、神話、儀礼、伝統なのかという点である。神話・儀礼と同じ位相にあるかのように「伝統」³が並ぶのも奇妙だが、それをひとまず置くとしても、神話・儀礼を宗教の中心要素とすることは、日本の宗教学では全く自明ではない。日本で神学とも宗教哲学とも個別宗教史とも異なる狭義の「宗教学」を経験科学として最初に提唱したと知られる、岸本英夫の『宗教学』は次のような構成になっている。

岸本英夫『宗教学』(1961年) 目次

- 1章 宗教学の領域
- 2章 宗教をどう定義するか
- 3章 宗教の基本的構造と機能
「人間の問題」／「文化現象」／「究極的」／「信じられている」
- 4章 個人における宗教
個人的宗教の構造／信仰体制の類型／宗教体験
- 5章 宗教的行為の形態
宗教的行為の性格／呪術／宗教儀礼／祈り／布教伝道と宗教的奉仕
- 6章 信仰体制の形成
信仰体制形成の方法／修行の基礎的性格／修行の方法
- 7章 宗教思想の諸相
宗教思想の構成／宗教思想の特質／人間観／世界観／神観／信仰体制と宗教思想
- 8章 社会における宗教
社会的宗教現象の構成／宗教的流派／宗教集団／宗教文化材／宗教的行動類型／日常社会と宗教的価値
(強調筆者)

「神話」は主要要素とされるどころか、言葉すら見あたらない。儀礼は「宗教儀礼」として節のタイトルに登場するが、呪術や祈りと並ぶ宗教的行為の一類型という位置づけである。宗教儀礼の内容は、「礼拝、祭祀、祝祭、法要、葬儀、成人、入信、洗礼、授戒など……通過儀礼も、儀礼の一形態である」⁴とされている。

筆者は以前、戦後の日本の宗教学における神話研究の影の薄さと、その原因としての国家神道問題を指摘したことがあるが⁵、研究がなされていないどころか、「宗教」概念の外延(要素)に「神話」は入っていないのである。

神話と儀礼のセットは、信と行の二項対立の一変形だから、これもまた「西洋近代的宗教」概念だと言ってしまえばそれまでになる。だが、ここで注目したいのは、「神話と儀礼」が現在これほどまでに目立つのは、アメリカの宗教学の特徴ではないかということだ。言うまでもなく、ヨーロッパを中心とした20世紀前半までの宗教学では、神話と儀礼の関係は一大テーマだったが、それは宗教学が古代近東研究や古典学に近かった時代ならでのことだし、その時代ですら

その2要素が「宗教」概念の堤喩のごとく扱われていたわけではない。

比較のために、イギリスの宗教学者たちが2007年に作成した、「英国学士課程教育 神学・宗教学分野資格水準」（大学で宗教学を専攻した学生は、卒業までにどのような学力を身につけているべきかを示した文書）を見ると、宗教学と神学の対象は「（1つまたは複数の宗教伝統の）聖典、歴史、実践、神学（または宗教思想）the sacred texts, history, practices and developed theology (or religious thought)」⁶と表されている。宗教学とはどのような研究なのかを総論するという性格をもつ、A4版で20ページに及ぶこの文書の中で、「神話」の語は2回、「儀礼」の語は3回（うち2回は形容詞形）使われるだけである。そのうち1回は「(かつての)人類学の「神話と儀礼」アプローチから現代の民族誌への変化」⁷という方法論の移行が、宗教学では広く認知されているという文脈で登場する。つまり、「神話と儀礼」は宗教学というより人類学、しかも時代遅れの対概念としてとらえられている。

AAR学会賞に関してもう一つ興味深いのは、4部門が「宗教社会学」「宗教心理学」等によって構成されていない、つまり宗教学を下位分類する上で、「宗教〇〇学」というカテゴリーが使われていないという点である。より正確には、宗教社会学や宗教心理学は、この4部門のいずれにもよく適合しないように見える。言い換えれば、AARが体現しているような、アメリカ人から見ての典型的宗教学は、4部門が示しているように「人文的」なのである。AARの中にも宗教社

【表1】AAR学会賞「分析的一記述的研究」（2000年以降）

Amira Mittermaier

Dreams that Matter: Egyptian Landscapes of the Imagination, 2011

Kimberley Christine Patton

Religion of the Gods: Ritual, Paradox, and Reflexivity, 2009

G. John Renard

Friends of God: Islamic Images of Piety, Commitment, and Servanthood, 2008

Leor Halevi

Muhammad's Grave: Death Rites and the Making of Islamic Society, 2007

David Frankfurter

Evil Incarnate: Rumors of Demonic Conspiracy and Satanic Abuse in History, 2006

Jonathan Z. Smith

Relating Religion: Essays in the Study of Religion, 2004

Joanne Punzo Waghorne

Diaspora of the Gods: Hindu Temples in an Urban Middle-Class World, 2004

David H. Brown

Santería Enthroned: Art Ritual and Innovation in an Afro-Cuban Religion, 2003

Paul Christopher Johnson

Secrets, Gossip, and Gods: The Transformation of Brazilian Candomblé, 2002

Susan Friend Harding

The Book of Jerry Falwell: Fundamentalist Language and Politics, 2000

Bruce Lincoln

Theorizing Myth: Narrative, Ideology, and Scholarship, 2000

会学のグループは存在するが、宗教社会学は基本的に、組織として別のものなのである。AARはその関連学会として約40の組織を有するのだが、総じて人文的であり、宗教社会学会(The Association for the Sociology of Religion)は入っていない。この状況に比べると、日本の宗教学では、1970年代～90年代の宗教社会学研究会の旺盛な活動、日本宗教学会と構成メンバーが大幅に被る「宗教と社会」学会の存在など、社会科学色が強い。

では、AARを宗教擁護的(神学的)だと批判してきたNAASRは、宗教社会学寄りなのかというのと、どうもそうではない。その学会誌である*Method & Theory in the Study of Religion*の過去12年分を検索してみると、ideologyという語を文中で1回以上使う論文は137件だが、このところ日本の宗教社会学を賑わせている公共圏と宗教というテーマはどうかというと、public sphereは16件、Casanova 2件、Charles Taylor 3件⁸である。代わりにこの雑誌では認知科学が花盛りである。やはり日本の宗教学に対応するようなものではない。

この、「宗教は神話と儀礼から構成される」という宗教概念に基づく人文的宗教学の伝統をアメリカに浸透させたのは⁹、主として“シカゴ学派(シカゴ大学大学院神学研究科宗教学[History of Religions]専攻の出身者・関係者)”であると考えられる。括弧に入れたのは、学派と呼びうるものが存在するのかということ自体、後述のように議論の対象になってきたからだが、前述の「分析的一記述的研究」部門の受賞でも、シカゴ出身者は強い存在感を放っている(表1)。Lincoln、Johnson、Waghomeはシカゴ大学宗教学専攻の出身、Smithはそこで教えた人物である。ハーバード大学の出身者は3名だが、そのうちPattonは神学研究科宗教学専攻の出身であるものの、Renardは中東研究学科出身、Haleviも中東研究と歴史学科の出身である¹⁰。一般に「アメリカ宗教学界に対するシカゴ学派の影響」というと、Eliadeの影響と同義として受け取られそうだが、これらの受賞作には宗教普遍主義や本質主義をとる者はない。しかし、シカゴ大学の宗教学専攻は、院生を、「宗教学らしい宗教学」と教員が想定するある一定の方向へと教育してきたということ、そしてこの部門の受賞者にその出身者が多いことから、その「宗教学らしい宗教学」像が、よかれあしかれアメリカの宗教学界でも共有されているということが言えるだろう。¹¹

筆者は以前、アメリカで「宗教学らしい宗教学」を示すために使われてきた「History of Religions(HR)」という概念をとりあげ、その特徴の一つとして「神話解釈の伝統」があることを、HR的宗教学者の研究内容を比較しながら論じた¹²。本稿では、次章より、大学制度史の観点から、なぜシカゴ宗教学は「神話と儀礼」の人文学なのかについて別の光を当てていく。

2. 制度史からみたシカゴ学派

学部を問わずシカゴ大学には「シカゴ学派」がしばしば出現する。シカゴ宗教学の出身者、Charles Longは「宗教学(HR)におけるシカゴの伝統に関する一考察(A Look at the Chicago Tradition in the History of Religions)」論文において、学派形成は、理論・方法論に関する高い関心が動因である、還元すれば「イデオロギイ的純粋さに対する欲望の現れではなく」、「自分は何をやっているのか、なぜそれをやっているのかについての自省的関心」¹³を示していると述べている。対照的な存在として意識されているのはハーバード大学の宗教学である。ハーバードでは理論・方法論よりも、各自専門とする個別宗教史に通暁することが要求される。一人ひとりが自分の庭づくりに専念する環境では、学派のような共同体は形成されない。

もともと、シカゴ大学の宗教学専攻にも、自分たちは「学派」なのかについては懐疑論が多い。出身者の一人、R. Gardner は、シカゴ学派の神話時代（神々がこの世に存在している時代）と言われる 1960 年代について、その神々を構成していた、Eliade、Kitagawa、Long、さらに Reynolds、Smith を紹介しながら次のように述べている。

この時期の状況が示唆するように、宗教研究の方法論についての合意という点から見ると、シカゴが決して「学派」といえないことは明らかである。理論と方法はいつも強調されていたが、それに関する合意が得られることは決してなかった。¹⁴

筆者が 1990 年代に Reynolds に尋ねた時も同様の答えが返ってきた。2012 年の AAR 年次大会（開催地シカゴ）では、1950～60 年代にシカゴで学び、ウェスタンミシガン大学宗教学科で 40 年以上教鞭をとった N. Falk も、「あると言えるのは、学派ではなく、シカゴ・スタイルと呼ぶべきものだ」という趣旨の発表をし、その特徴として、理論への関心、比較の重視、non-verbal な対象を好んでとりあげること等を挙げていた。

このようなシカゴ宗教学内の自己理解は、日米を問わず宗教学界での一般的なシカゴ宗教学のイメージとは合致しないだろう。つまり、シカゴ宗教学の外では、シカゴらしさとは宗教の還元不可能（sui generis）性を前提とし、普遍主義的な宗教現象学の方法をとり、宗教の本質を「聖なるもの」に対峙する宗教体験と同定することだという理解がある。しかし、内部では、シカゴらしさとは、スタート地点では特定の宗教史を自分の専門として選ぶとしても、比較や理論を重視し、さらに、その研究をやって何になるのか、宗教学とは何か、といったことを反省的に問い続けることだとみなされている（ハーバードやプリンストンにはそれはない）¹⁵。シカゴ宗教学のメンバーは、その問いを共有する限りでの統一体なのである。

しかし、それならば、なぜシカゴ宗教学は神話と儀礼の人文学という特徴を帯びるようになったのか。以下では、まずアメリカ宗教学の制度史を概観し、さらにシカゴ大学大学院神学研究科の制度的変化を分析し（シカゴ大学では学部レベルに宗教学科は存在しない）、シカゴ宗教学はいつから・なぜ神話と儀礼の人文学になったのか、その社会的意味は何かを探っていく。

（1）アメリカ宗教学の制度史

アメリカの宗教学、あるいはアメリカの大学と宗教の関係は、近年に至るまで、世俗化のテーゼにしたがってとらえられていた。すなわち、アメリカの大学はキリスト教の聖職者養成機関として始まったが、19 世紀後半（南北戦争）以降は信仰と理性の分離が進み、世俗的な研究・教育機関へと変容を遂げたという理解である。神学はこの世俗化プロセス以前からの宗教研究、宗教学は世俗化に伴い発生した宗教研究ということになる。宗教学は「啓蒙主義の子」という古典的な学説史的理解とも一致する。

これに対して、D. G. Hart, *The University Gets Religion: Religious Studies in American Higher Education* (1999) は、これを科学的理性が宗教を駆逐した過程ではなく、プロテスタント勢力が時代に即した形で高等教育組織を再編した過程としてとらえ直した¹⁶。ここではこの書を祖述することから始めるが、それは、アメリカ宗教学の制度史については、この書はもともと総体的か

つ学術的(クリティカル)であり、また、20世紀アメリカというコンテクストにおいて人文学のもつ社会的意味を宗教学に結びつけて論じていることによる。(近年になるほど、世俗化史観に則ったポスト・セキュラー的論調の大学史研究が増えているのだが、そういった異なる歴史観・イデオロギーに立つ他の研究者の歴史記述と中途半端に組み合わせることは避けることにする。)

大まかな時代区分を、南北戦争、第一次世界大戦と大恐慌、カウンターカルチャーを転機として設定する。

第1期 1870～1925年頃

南北戦争以前に創立された大学としては、ハーバード大学(1636年)やプリンストン大学の前身であるニュージャージー・カレッジ(1746年)が代表的だが、それらは牧師養成のための機関として始まった。教育・研究されていたのは神学、しかもWASPのそれであり、また、カレッジやセミナリー(神学校)は教派(デノミネーション)別に存在していた。

南北戦争後は産業・経済と科学の躍進期であり、これらの大学も自然科学・社会科学に重心をシフトしていく。成功を収めた実業家や財閥の寄付によって、ドイツの大学をモデルとした「研究大学」も新設されていった。コーネル大学(1868年)、ジョンズ・ホプキンス大学(1876年)、シカゴ大学(1891年)などである。この変化は宗教学に2つの帰結をもたらした。

一つは研究面における、非宗派的=中立的な宗教学(Religionswissenschaft=The Science of Religion)の導入である。宗教研究の科学化だが、具体的には、比較宗教学、宗教史学、古代オリエント学がこれにより始まった¹⁷。

もう一つは教育面の変化である。科学と経済の発展に面し、プロテスタント勢力は後退したのではなく、適応を図り、大学内に居場所を確保しようとした。それは、大学教育に対し宗教的理念を要請したり、カリキュラム外の活動(ボランティア・節制運動やYMCA)として学生の宗教的实践を奨励したりといった形をとった。大学教育全体の理念に宗教色を入れるというのは、1点目の科学化と矛盾するように見えるが、「宗教的理念」が特定教派ではなくEnlightened Christianityのものであり、しかもドグマではなく道徳面を指したためである。Enlightened Christianityとは、公共道徳の基礎としてのキリスト教を意味した。超教派的キリスト教は私的ではなく公共性を持つと考えられていたのである(超教派といっても、この時代はあくまでプロテスタント内の統合だったが)。大学は公共に仕えるべきであるという共通理解があり、功利主義的観点から、キリスト教は社会善を高め、公共の役に立つがゆえに大学教育に必要であるとされた。¹⁸

第2期 1925～1965年頃

この時期には、大学(カレッジとユニバーシティ)に宗教学が学科として設置されるようになった(すなわち、学部カリキュラムの中に宗教が組み込まれた)。その数は1945年から60年の間に倍増した。こうしてアメリカの宗教学の制度的基礎が築かれるが、その中心となったのは主流派プロテスタントの牧師や聖書学者であり、宗教学の内容は第1期よりもむしろ露骨にプロテスタント的であった。それには社会的変化が関係している。

まず、第一次大戦と大恐慌を経て第1期の科学主義・進歩主義的理想は失墜した。代わって人文諸学・人文的教養が再評価され、また、新正統主義(弁証法)神学者によるプロテスタント神

学の復権という現象がアメリカにも起こった。そして第二次大戦から冷戦期にかけて、アメリカ民主主義を支えるものとしてプロテスタント主流派とナショナリズムが結合した。大学のみならず社会全体のプロテスタント回帰である。西洋文明とアメリカ社会の源流としてキリスト教を学ぶことが大学教育において必要とされた。教養教育としての宗教学の自己正当化だが、それはアメリカ市民宗教の御用学でもあったと言える。

例を挙げれば、C. W. Gilkey (シカゴ大学の大学チャプレン) は、宗教と人文諸学の連関を問われた時、科学は「人間の経験を専門領域に分断し」、知的「偏狭」をもたらしたが、宗教は、哲学や芸術と同様に、「全体に広がり、究極の問いに向かい、最深の意味を求める」。しかも、宗教は「日常生活に遍在する」点で、哲学や芸術に優ると説明した。R. M. Hutchins (シカゴ大学総長) も、*The Higher Learning in America* (1936) の中で、統合的な一般教養の重要性を説いた。彼は「“偉大なる本”カリキュラム」を提案し、過度の専門化・科学主義や実学主義を否定し人文的教養を強調した。Thomas Aquinas や John Henry Newman に度々言及しているように、教養教育として宗教を学ぶことの必要性を訴えた。同様に、当時の教育改革に影響を与えた報告書、ハーバード大学の *General Education in a Free Society* (1945) は、従来のアメリカの教育の病理を治療するために「西洋の精神を形成した知的力」を学ぶべきである、したがって、「宗教教育、古典教育、近代民主主義教育」に根ざした教育が必要であると論じた。¹⁹

宗教学科のカリキュラムは、神学、聖書学、教会史が中心になり、プロテスタント系神学部・セミナーのそれとほとんど変わらない内容だった。プロテスタントの卓越性は前提とされ、さらに、分野を問わず教員はプロテスタントであることが評価されるようになった。プロテスタント主流派が、公共神学としてそれほどまでに力を持ったのである。²⁰

第3期 1965～1990年頃

宗教学が再びプロテスタント神学から分離するのは、カウンターカルチャー期である。体制派が批判され、民主主義とプロテスタント主流派の結合が自明性を失った。第2期には公共的と目されていたプロテスタント性が、偏狭な教派主義と見られるようになったのである。市民宗教的宗教学のプロテスタント中心性が批判され、代わりに比較宗教・世界宗教史が発展した。1964年にはAARが設立され、神学からの分離が明示的になっていった。AARの前身はNABL(the National Association of Biblical Instructors)だったが、nationalではなく国際性を打ち出し、公的でアカデミックな宗教学教育と宗教研究へと方向転換するため、学会名称も変更したのである。

他方、1963年に「アビントン学校区対シェンプ」裁判の最高裁判決により、公立校での聖書朗読や礼拝は政教分離に抵触するが、宗教知識教育は可能であるという判断が示された。これをきっかけに、それまで宗教系大学・私立大学を中心としていた宗教学科が州立大学にも拡大していった。高等教育機関の総数自体が増えたこともあり(1960-1990年の間に2000から3595へと80%増)、70年代まで宗教学科も飛躍的に増加した²¹。

宗教学科では、多文化主義、政教分離という面は徹底され、また専門化の結果、研究のレベルが向上し、隣接学科に比べ遜色なしと認められていく。しかし、内部を統合する原理・アイデンティティに欠け、宗教学科の存在意義は相対的に低下する。端的に言えば、他学科で宗教を研究しても宗教学科で研究しても変わらなくなっていったのである。

1990年代に入ると、不況や需要に対する供給の過剰（青年人口に対し大学数が多すぎる）により、学科が統廃合され、宗教学科もその危機に晒される。そのような状況で、宗教学の存在意義をどう訴えるかとなると、保守派は第2期のレトリックと同じものを使い、大文字の「意味」や「伝統」を持ち出す。ところが、第2期には健在だった人文的教養の意義自体が今では社会で共有されていないので、それに依存した正当化は難しい。他方、リベラル派は「神学とは違う」という以上の宗教学固有のアピールポイントを言葉にできていないままである。²²

以上のHartの歴史観では、現在のアメリカ宗教学の制度的確立期は第2期とされている。これに従えば、アメリカの宗教学が人文的になったのは、時代の社会的・政治的ニーズに適応した結果として説明づけられる。神話への関心は人文的教養の極み、古典学への志向性に重なる。ところが、シカゴ大学大学院神学研究科（Divinity School）の宗教学専攻は、カウンターカルチャー期以前、つまり第2期からWASP的ではなかった（教員がエスニック・マイノリティばかりだった）。この振れはどうとらえたらよいのか。シカゴ大学大学院神学研究科の中で、宗教学はどのような位置にあったのだろうか。

（2）シカゴ大学大学院神学研究科の制度史

シカゴ大学は1891年（1890年）に、アメリカバプティスト派教育協会（American Baptist Education Society）が、J. D. Rockefellerから資金を得て創立された。神学研究科の起源は1866年、シカゴ市のサウスサイドに設けられた、バプティスト派のセミナリー（Baptist Union Theological Seminary）にまで遡る。Rockefellerがシカゴ大学創立のための寄付を検討していた時、このセミナリーからも打診を受けたので、大学内の神学研究科として新生するならばという条件を出した。ちょうどセミナリー側も、時代の変化を感じ取っており、これからは社会的影響力を高め、研究の水準を上げるには、教派を越えた広い視野を可能にする総合大学に所属することが望ましいと考えていたので、Rockefellerの提案は渡りに船だった。こうして神学研究科は大学の創立時から（正確には1892年から）の研究科（school）となった²³。

Rockefellerにはシカゴ大学をバプティスト系の大学にする思惑もあったというが、それに対して、新型の研究大学にふさわしく、超教派的なキリスト教の科学的研究を進めようとしたのは初代総長のW. R. Harperだった。彼自身、当時の中心的な旧約学者だったが聖職者になることはなかった。第1期の新設大学の中で、神学研究科として宗教学のプログラムを設けたのはシカゴ大学だけだが、これはHarperの存在によるところが大きい。²⁴

神学研究科で最初に比較宗教の教授に着任したのは、George Stephen Goodspeed（1860～1905）である。Baptist Union Theological SeminaryでHarperに師事し牧師にもなった後、ドイツ留学を経て、シカゴ大学大学院神学研究科の准教授に1892年から就任し、「古代史」「聖書史」「エジプト史料研究」の授業を開講した。研究分野は次第に聖書史学・古代オリエント学から比較宗教へと移り、1898年には、「古代史ならびに比較宗教」の教授（歴史学・宗教学兼任）となった。比較宗教といっても聖書学の延長線上のもので、早世する1年前に出版した、*History of the Ancient World*（1904）は、古代エジプト・バビロニア文明、ギリシャ・ローマ文明のみから構成されていたが、確かにHartの言う第1期の新しい宗教学を体現している。

Goodspeed を継いで比較宗教を教えたのは、A. Eustace Haydon (1880~1975) である。カナダ出身のバプティスト派の牧師だが、ヒューマニストとしても知られる（世俗主義ヒューマニストではなく、宗教的ヒューマニスト。ユニタリアンに近い）。Ph.D.をシカゴ大学大学院神学研究科でとった後、1919~45年の間、その比較宗教学科（department of comparative religion）の教授を務めた。彼はそれまでの比較宗教学が発展史的・本質論的であること、すなわち「宗教」の普遍性を前提とし、体系を持ちこむことを批判し、経験科学的に諸宗教の歴史を研究することを推進した。大宗教を並べていく「世界の宗教」スタイルだが、諸宗教の歴史的变化や宗教ごとの近代科学や近代社会・経済問題への対応など、宗教の動的な側面をとらえようとした。*Biography of the Gods* (1941) はゾロアスター、インド、仏教、中国宗教、神道、ユダヤ教、キリスト教、イスラムをこの順序でカバーしたものである。キャリアは第2期にかかるが、第1期の学風を持っていたといえよう。

そして Haydon に続くのが、シカゴ学派の祖とみなされる J. Wach である。ドイツ人である彼は Haydon とは対照的に体系を好んだ。シカゴで *Sociology of Religion* を著した彼の研究は、宗教社会学に近い宗教現象学・解釈学として日本にも紹介されてきた。しかし、彼の教授在任期間（1945~1955）は、人文学が再評価される第2期に該当する。当時のシカゴ宗教学を、アメリカの大学とシカゴ大学大学院神学研究科という制度的なコンテクストでとらえるならばどうなるだろうか。ここではカリキュラム資料を解明の手がかりとする²⁵。

Wach が加わる前の 1943 年の学生用便覧を見ると、神学研究科は 4 分野（field [of interest]）に分かれていた。掲載順に挙げると、「歴史」「聖書」「神学」「実践」的の分野である。なぜこの順なのかについては説明がないが、歴史研究や聖書研究が神学や「実践」と表現されているミニストリー（牧師養成）プログラムよりも先に配されているのは、第2期の特徴を反映していると解釈できる。大学の神学研究科は旧来のセミナーとは異なり、まずは人文学として宗教を研究するということである。そして、この「歴史」的の分野は、教会史・キリスト教史を中心とするが、キリスト教以外の宗教史をも含むものであった。

Wach を迎えた 1945 年からは、これらに「宗教学（History of Religions、以下 HR）」という分野が新たに加わった。「歴史」分野から、キリスト教以外の諸宗教の歴史が切り取られたのである。Wach の肩書も「HR」の教授だった²⁶。便覧では、上記 4 分野に続いて 5 番目に掲載されている。

1950 年代に入ると大きな改編が行われ、神学研究科は 8 分野に分けられた。便覧の掲載順では「歴史」「聖書」「神学」「倫理と社会」「宗教学（HR）」「宗教と芸術」「宗教とパーソナリティ」「実践神学（ミニストリー・プログラムと同義）」である（同じ便覧の他の箇所では「聖書」「教会史 Church History」「宗教学」「神学」「芸術と宗教」「倫理と社会」「宗教とパーソナリティ」の順になっているので、順序は厳密なものではないらしい）。

新たに登場した「倫理と社会」「宗教と芸術」「宗教とパーソナリティ」の 3 分野は、社会学・社会倫理、美学・芸術学、心理学のアプローチを宗教研究に取り入れたものである。すなわち、宗教学（HR）に隣接して、宗教社会学や宗教心理学の分野が設けられたのである。ここだけを見るなら、シカゴ宗教学（HR）が人文的なのは当然だ、Wach の時代から同じ研究科内に宗教社会学も宗教心理学も別にあっただけから、とすぐに結論が出そうだが、事はそれほど単純ではない。

<p>【表 2】「倫理と社会」(1950) 授業と担当者 (1951 年の便覧も参照した)</p> <p>基礎コース 「宗教社会学」 社会学と社会心理学の方法を、宗教制度と宗教体験に適用。Kincheloe 「教会、共同体、社会秩序」 制度としての教会が、現代社会と共同体内の、社会的諸力・社会問題・組織にどう関係するか。Kincheloe と Obenhaus (農業・工業生活におけるキリスト教の専門家) 「キリスト教倫理と哲学的倫理の歴史」 Adams (倫理学の専門家) 「現代社会の構造とダイナミクス」 Adams 「現代の社会問題に対する哲学的 constructive なアプローチ」 Thompson (キリスト教倫理の専門家)</p> <p>上級コース 「マルクス主義と現代神学」 「歴史哲学」(特に倫理学との関係) 「現代プロテスタント社会倫理史」 「現代文学の倫理的価値」 「都市共同体における教会」 都市地域のタイプとそれぞれの特徴的問題に、教会がどう関係するかの研究。 「産業生活の中の教会」 「農村生活の中の教会」 「共同体と教区研究の方法」 「宗教研究 study of religion における社会学的方法」 「都会の宗教生活の調査」 「農村の宗教生活の調査」 51 年には「教会と人種関係」も。</p>	<p>「宗教とパーソナリティ」(1950) の授業</p> <p>基礎コース 「宗教とパーソナリティ I」 人間科学のうち、人格とその宗教との相互関係を理解する上での、基礎的発見を学ぶ。 「自由」「良心」といった、宗教でも人間科学でも関心がもたれる概念が、その本性と意味を解明するための、科学的データと方法に照らして検討される。 「宗教とパーソナリティ II」 人間発達に関する科学的知識を用い、キリスト教の信仰に対する体系的理解への一つの道を示す。 「宗教とパーソナリティ III」 人間発達に関しての科学的知識を、宗教的指導者の役割と機能の分析に適用する。宗教的指導者とは、牧師、カウンセラー、教育者、グループリーダー。</p> <p>上級コース 「牧師カウンセリング入門」 「心理学とキリスト教倫理」 「礼拝 worship の心理学：理論と実践」 「児童の宗教教育」 「青年の宗教教育」 「成人の宗教教育」 「宗教教育の心理学」 「宗教教育をめぐる議論」 「教会の教育プログラム」 「宗教心理学」 「教会と国家：宗教と公教育」 (「教会史」分野の授業) 「教会生活におけるグループ・ダイナミクス」</p>
--	---

授業内容(表 2)を見るならば、「倫理と社会」分野には、Wach の宗教社会学の射程にはない、現代アメリカの都市・農村宗教に対するフィールドワークの授業がある。担当しているのは Samuel Kincheloe、シカゴ大学で Ph.D.をとった、牧師でもある宗教社会学者で、当時の社会学のシカゴ学派の方法を宗教学に適用したのである。自分と同じように牧師になるであろう院生たちを動員し、急速な都市化に教会はいかに対応できるかという課題を現場に即して検討するプロジェクトを行っていた。

「宗教とパーソナリティ」も同じく実践的で、発達心理学とカウンセリング理論を用いた、牧師によるパストラル・ケアやカウンセリングの実践に関する研究と、宗教教育の研究の 2 つが主な内容になっている。年によって「フロイトと宗教」(1952)、「宗教体験研究(ジェイムズ、ス

ターバック、オルポート)」(1956) などが入ることもあるが、基本は牧師になる院生たちにとって直接的に有用な実践的授業である。

これらに比較してみると、「宗教学 (HR)」の授業は極めて非実践的、人文的である (表 3)。

「宗教と芸術」分野の授業も実践色は薄く、人文的で、対象の多くが文学と演劇である。神話が主題となる授業もあるが、毎年開講されているわけではない (1952 年に「ギリシャ神話とユダヤ神話」という授業があるが、神学分野の科目をこの分野でも認定するという形式)。

「宗教哲学」と「倫理学」は「神学」分野の下位分類として組み込まれているが、授業は「倫理と社会」分野と重なっている。

「宗教社会学」も「宗教倫理学」も存在したのなら、HR とまとめて「宗教学のシカゴ学派」を形成してもよさそうなものなのに、そうならなかったのは、前 2 つの分野は (リアルでローカルな) キリスト教教会に直結しており、HR とは目的も教員の種類も全く違っていたためである。

教員に関しては、種類だけでなく数にも開きがあった。シカゴ学派として後世もっとも有名になるのは「宗教学 (HR)」だが、教授の配分は圧倒的に少なく、Wach だけだった (アドバイザー・メンバーとして、この時の神学研究科の研究科長である B. M. Loomer の名が付加されているが、彼は新正統派神学の専門であり、HR 関係の授業は出していない)。対して、「聖書」分野は 8 人の教授、「歴史 (教会史)」は 6 人の教授、「神学」は 10 人の教授、「宗教と芸術」は 1 人の教授と 4 人のアドバイザー・メンバー、「倫理と社会」は 5 人の教授、「宗教とパーソナリティ」は 4 人の教授が担当していた²⁷。加えて Wach は外国人である。神学研究科内の勢力関係では、宗教学は最弱だったと考えられる。

神学研究科全体の教育目的は、便覧冒頭で Loomer が滔々と述べているが、要は、牧師というリーダーを目指す若者たちが、信仰と知を統合させつつ成長することを目指すというものである。宗教教育の大学院バージョンという印象を受ける。院生たちは所属の分野以外の授業もとることができるので、牧師の卵たちの知見を広げるという役割を、HR や芸術分野が果たすと考えられていたのだろう。また、HR 所属の院生たちは Wach を師とする「サンガ」と呼ばれていたというエピソードが回想録の類に登場するが、確かにプロテスタント教会と直接の関係がないのは (「宗教と芸術」の他は) HR のみであり、異色を放っていたことが窺われる。ただし、その中にいた Kitagawa、Long、Reynolds といった後のシカゴ学派のメンバーは、みな牧師でもあったのだ。

【表 3】「宗教学 HR」(1950) の授業
担当はすべて Wach

基礎コース

「宗教史研究 study of the HR 入門」

宗教体験と、それが、教義、礼拝 cult、組織にどう顕現 manifestations しているか。

「現存する世界宗教」

イスラム、ヒンドゥー、仏教、儒教。

上級コース

「未開宗教」

オーストラリア、アフリカ、アメリカインディアンの宗教のタイプと基礎概念。

「ヒンドゥー教」

歴史、教え、実践、主な指導者の研究。

「宗教学 sciences of religion の歴史と方法」

比較研究、方法論、主な理論の発展。

「ルドルフ・オットーと宗教学 study of religion」

オットーの体系的・歴史的研究。評価と批判。

51 年は「初期仏教」「宗教科学の方法」「比較教義学」「キリスト教以外の宗教の偉大な指導者たち」

Wach が急逝し、Eliade が加わった 1956 年には、「歴史」分野は「キリスト教史」、「神学」分野は「キリスト教神学」と名前を変え、掲載順も若干変化した。「聖書」「キリスト教神学」「倫理と社会」「キリスト教史」「宗教史」「宗教と芸術」「宗教とパーソナリティ」の 7 分野と、ミニストリー・プログラムがあるという構成である。

宗教学 (HR) の授業は Eliade と Kitagawa の 2 名が担当している (表 4)。

「倫理と社会」や「宗教とパーソナリティ」分野の内容は変わっていない。

間もなく宗教学のスタッフに Long が加わる。1960 年代に入ると、便覧には、各分野の全体的特徴に関する長文の説明が一斉に現れる。1961 年は Eliade、Kitagawa、Long が雑誌 *History of Religions* を創刊した年だが、この時の「宗教学 (HR)」分野の説明文には、一般に、シカゴ学派らしいとみなされている「現象」「解釈学」「形態学」「顕現 manifestation」「宗教体験・経験」「意味」「還元不可能性」といった言葉がちりばめられている。紙幅の関係で要約せざるをえないが、次のようになる。

宗教学 HR では、人類の歴史における宗教現象の現れ manifestations の意味を研究する。宗教現象とは、超越という究極の次元を指し示す人間の経験 (体験) の歴史的現れのこと。それは社会・心理学的に還元的にも研究できるが、宗教学では、超越性を宗教固有の specifically カテゴリーとみて解釈する。宗教体験とその表現は、明確な構造を有する。その構造をとらえるのが解釈学であり、宗教の形態学の歴史が HR なのである。

このシカゴ学派の一連の決まり文句は、しかしながら、これまでのカリキュラムの変遷に照らすと、また別の見方も可能になる。History of Religions という分野は、神学研究科の制度上は明らかに、「歴史」分野が専門分化し、キリスト教史とそれ以外の宗教史が分けられたことにより現れた。他方、現代宗教の諸問題は「倫理と社会」「宗教とパーソナリティ」分野が担当した。しかし、次第に HR の分野は独り歩きを始め、61 年のこの説明文では、神学研究科全体のカリキュラムの中で特定領域を役割分担しているという意識は全く

【表 4】「宗教学 HR」(1956) の授業

基礎コース

「宗教学 HR 入門」

宗教体験の理論と、キリスト教世界において、宗教体験が、教義、礼拝 worship、共同体 fellowship においてとられる表現 expression の諸形態。Kitagawa

「現代の世界宗教」

イスラム、ヒンドゥー教、仏教、儒教の歴史的・教義的・礼拝的 cultic 発展。これらの宗教と文化の影響関係。とくに現代に関して。

Kitagawa

上級コース

「シャーマニズム」Eliade

「ヨガの理論と実践」Eliade

「宗教形態学」1~3 Eliade

【表 5】「宗教学 HR」(1961) の授業

基礎コース

「宗教学 HR 入門」Long

「現代の諸宗教における宗教構造」Long

上級コース

「東南アジアの宗教」Kitagawa

「東アジアの宗教」Kitagawa

「宗教シンボリズム」Eliade

「神話の問題」Eliade

「未開宗教入門」Long

「文化と宗教」Long

「神道の諸相」1・2 Kitagawa

「イニシエーションの構造」Eliade

「ヨガの理論と実践」Eliade

窺われず、HR だけで人類の宗教を全てカバーしているかのような、自己完結的なナラティブになっている（表5の授業一覧が示すように、実態としてはキリスト教以外の宗教が対象だが、そのような断り書きは説明文にない。また、過去の歴史的宗教だけでなく、現代の宗教変容も分析すると謳われている）。

ただし、当時の神学研究科の実態だったのだと思うが、受講者は牧師候補生であるということが前提とされた文章がこれに続いている。この分野の入門授業は、神学の学生に、宗教現象学的、宗教学 HR 的アプローチにまずなじんでもらうためにある、そして学生たちは、この分野の方法とデータに、神学的意味を与えることを期待されている、と書かれている。

そして、授業タイトルには「神話」の語が登場するが、説明文の中に、神話、儀礼という言葉はないという点にも注意しておきたい。授業の中では神話も儀礼も扱われたに違いないが、「宗教」概念は「宗教現象」と括られるだけで、そのように要素に分解されてはいない。なお、この年も「倫理と社会」と「宗教とパーソナリティ」分野の方向性は変わっていない。

カウンターカルチャー運動が盛り上がった1960年代末はどうだろうか。J. Z. Smith がカリフォルニア大学サンタ・バーバラ校から移ってくる1967年の便覧を見てみよう。

「宗教とパーソナリティ」分野では、説明文で「development」の語は使い続けられているが、宗教教育関係の授業が消えている。「アビントン学校区対シェンプ」裁判の影響も考えられなくもないが、おそらくより大きな原因は、神学研究科の院生が多様化し、牧師候補生ばかりではなくなったということであろう。他の分野では、「宗教と芸術」が「神学と文学」に変更されている。

「宗教学 HR」分野は、最初の説明文は同じだが、授業数が格段に増える。この原因は、他学部・他専攻との合同授業の増加にあるようだ。授業一覧（表6）の担当者名にある、Marshall

【表6】「宗教学HR」（1967）の授業

「宗教の世界史」1～3	Hodgson と Long (社会思想と合同)
「非西洋のヒストリオグラフィー」	Hodgson と Smith (社会思想と合同)
「中世イスラムの科学」	Hodgson (社会思想と合同)
「コーラン解釈」	Hodgson (社会思想と合同)
「宗教的問題 the religious problematic」	Long
「現代と宗教」Long	
「宗教の様相 modalities」Long	
「古代近東の宗教類型」Ahlstrom	
「大乘仏教の諸相」1～2 Kitagawa	
「日本宗教史」1～2 Kitagawa	
「未開宗教1：狩猟採集民族」	Eliade (社会思想と合同)
「未開宗教2：農耕民族」Hodgson	
「ヒンドゥー教 リグ・ヴェーダからバガヴァッド・ギータまで」	Eliade (社会思想と合同)
「神話と儀礼」	Eliade (社会思想と合同)
「メソポタミアとパレスチナの預言者」	Ahlstrom (旧約学と合同)
「グノーシス主義入門」	Grant (新約学と合同)
「アフリカの宗教：西アフリカ」Long	
「アフリカの宗教：ヌエルとディンカ」Long	
「高神」Long	
「世界宗教の倫理」Kitagawa	
「世界宗教のコスモロジー」Kitagawa	
「現代と世界宗教」Kitagawa	
「コスモゴニー神話」	Eliade (社会思想と合同)
「神秘的光の現象学 未開宗教からキリスト教まで」	Eliade (社会思想と合同)
「東と西の神秘主義」	Eliade (社会思想と合同)
「イランの宗教」	Eliade (社会思想と合同)
「初期キリスト教 ギリシャ・ローマ世界」	Grant (新約学と合同)

Hodgson は学部で「文明」コース（core “civilizations” courses）を中心的に担った、イスラム研究と世界史を専門とする、「社会思想」プログラムの教授だった（68年に急逝）。また、G. W. Ahlstrom や R. M. Grant は同じ神学研究科だが旧約学や新約学の所属で、兼任という形で授業を出していた。

興味深いのは、Eliade が「神話と儀礼」や「未開宗教」、Long がアフリカの部族宗教に関する授業を出しているのに、いずれも人類学科との合同授業ではないということである。代わりに Eliade の授業は「社会思想」プログラムとの合同となっている。

この「社会思想」こそは、第2期に人文的教養の重要性を説いた大学総長 Hutchins が肩入れして 1941 年に開始したもので、大学院のプログラムでありながら、専門主義を排した学際的な内容で、人間の根本問題を問うという理念を掲げていた。途中から Eliade も関わった他、P. Ricoeur、人類学からは R. Redfield、V. Turner、社会学からは E. Shils、政治学からは Hannah Arendt、Allan Bloom など、要するに大きな問題を正面から扱える著名人を集結したものだだった。ともあれ、他学科の社会学や人類学、あるいは歴史学よりもこのプログラムと HR は相性がよかったことはカリキュラムからは明白である。

1970 年代に入り、71 年の便覧を見ると、分野説明部分が縮小されている。全分野で一律に減らしたようだが、「宗教学 HR」のそれは、従来の説明文からところどころ抜粋して繋ぎ合せたものであり、意図的かどうかかわからないが、結果として「反還元主義」の印象を与えなくなっている。

この年の「宗教学 HR」の担当者は、Eliade、Kitagawa、Long の他、Ahlstrom、Smith、Reynolds の 6 人である。神話・儀礼に関係するところでは、Smith が「宗教学 HR 再考 神話と儀礼」、Long が「コスモゴニー神話」、Eliade が「神話とシンボル」という授業を出している。

神学研究科全体では、「神学と文学」分野が「宗教と文学」に名称変更したほか、「倫理と社会」「宗教とパーソナリティ」がいずれも「教会」に軸足を置く研究ではなくなったことが大きな変化である。両分野とも教授陣が代替わりし、牧師を目指さない院生の関心に応えるものになっている。

「倫理と社会」は、政治学との接点が増え、社会・政治に対する経験科学的研究と公共政策学を組み合わせたものになっている。「教会と社会」という枠は消えたが、アクション・リサーチを取り入れるなど実践性は継続されている。

「宗教とパーソナリティ」分野では、説明文はそれまでのものを踏襲しているが、パストラル・ケアや宗教教育の授業がなくなっている。教員は Don Browning と Peter Homans である。Browning は牧師であり、自身の研究としてはこの時期パストラル・ケアを対象としていたが、この分野では心理学理論の授業を出している。Homans はフロイトとユングの理論研究者である。

さらに 73 年になると、「宗教とパーソナリティ」分野は「宗教と心理学」に名称変更され、分野説明文も一新されている。それまでのキーワードだった development と existential がなくなり、心理学は多様な方法を用い宗教を探究する学であると謳うのみになり、実践的側面は消滅した。実際に開講されるようになった授業に合わせたのである。

77 年の便覧の「宗教学 HR」の箇所では、それまでの分野紹介文に、宗教史 HR、宗教現象学だけでなく、人類学、社会学、地域研究の授業もとるようにと勧める文章が加わっている。Long が他大学に移った後である。

また、博士論文にとりかかる資格を得るための筆記試験（博士課程進学後、数年のうちに受験）の領域が便覧で明確に定められている。①ディシプリンの歴史と方法 ②宗教現象の比較 ③スペシャル・エリア（院生が専門とする個別宗教史に関する出題）である。

79年には、それまで fields と表記されていた分野の呼称が、areas of study（研究領域）に変わり、掲載順では「神学」が最後に配された。それまで「神学」が最初に掲載されることは一度もなかったが、ついに最後に回されたのである。

「宗教学 HR」分野には、78年から Wendy Doniger O'Flaherty が加わっていたが、この年から分野紹介文ががらりと変わっている。全文掲載はできず、多少要約的になるが、

HR では、神話、象徴、教義、儀礼、祈祷 devotional practice、瞑想、聖なる共同体といった、典型的な宗教形態を研究する。まずこれらの現れ manifestations を見出す identify。そして、人間の本性と歴史を理解するため、そのような顕現の意味 significance を解釈する。

意味 meaning を解読 decipher することが中心になるが、その意味は、特定の顕現が、その直接的な文化的・時間的コンテクストの中でのものと、より普遍的に、諸宗教の一般史の中で、似た顕現が起こるコンテクストの中でのものがある。

明らかな変化は、現象と経験・体験の語が消えていることである（このため、manifestations が何の現れなのかが不明になっている）。Wach 的ボキャブラリーが一掃されたのだ。推測になるが、これはインド学・サンスクリット文献学を専門とし、ハーバードやオックスフォードで学位を取った、つまり、宗教現象学・解釈学のことをほとんど知らない Doniger の影響であろう。「宗教現象」という包括的な一語の代わりに、その中身が列挙されることで「宗教」概念の内実が示されている。ここではじめて、「神話」と「儀礼」の語が紹介文に登場してきた。そして、Doniger はヒンドゥー神話の授業担当という役回りを得た。（他のスタッフは、Eliade、Kitagawa、Reynolds、Ahlstrom。）

さらに神話と儀礼が対概念として強調されているのは、前述の資格試験問題の説明の部分である。この年から領域は3から5に増えた（表7）が、それまで「宗教現象の比較」と名付けられていた領域が、③「神話、シンボル、教義」と④「実践」の比較研究へ分けられている。言葉としては、「儀礼」ではなく「実践」が用いられているが。

1980年代に入ると「倫理と社会」分野は倫理学が中心になり、経験科学性が減少するが、「宗教学 HR」分野に大きな変化はない。

86年には Eliade が逝去し、宗教学分野は L. Sullivan を、さらに I. Culianu を迎える。

89年には、「宗教心理学」分野が「宗教と人間科学」に代わり、宗教社会学は倫理学から分かれ、この新分野の中に統合された。つまり、この人間科学とは心理学と社会学のことである。

その結果、研究科全体では分野は「聖書」「キリスト教史」「宗教史」「実践神学」「宗教倫理学」「宗教と人間科学」「宗教と文学」「神学」（掲載順）の8分野となった。なぜこの順番なのかは

【表7】博士論文資格試験問題の領域
(1979)

- ①宗教学 HR の歴史と方法
 - ②宗教学における古典（主に聖典）
 - ③比較研究：神話、シンボル、教義
 - ④比較研究：実践、共同体生活
 - ⑤スペシャル・エリア
- ③と④については、2つ以上の宗教伝統に関して比較すること、とある。

推測もつかない。

「宗教学 HR 分野の変化」は、資格試験問題のうち、③の領域から「教義」が消え、「神話とシンボル」だけになったこと位である。だが、これは本稿の主題に照らせば大きな変化である。諸宗教の神話の比較は必須だが、教義の比較はそうではなくなったのだから。

90年代になると、「宗教と人間科学」の社会学の担当として、宗教学社会学理論を専門とする M. Riesebrodt が入る。91年には、宗教学 HR 分野の資格試験問題の②「宗教文学における古典」が「未開」の概念とそれに関連する研究」に変わっている。このため、見かけ上はいっそう人類学的になっている。見かけ上は、というのは、この時の教員をみると、むしろ古代史や宗教哲学を専門とする者が新たに加わっているためである。Doniger、Reynolds の他、新メンバーとして日本(古代)宗教史の G. Ebersole、宗教哲学・仏教哲学の P. Griffiths、さらに associate として Smith が名を連ねている。

90年代の大きな変化としては、8分野に「ユダヤ教史」が加わった他、全体が大きな3コミティー(委員会)に分けられ、教員は分野ではなくコミティーに所属するという体裁になる(表8)。

宗教学は HR という名称を維持しながらも「歴史的研究」ではなく「宗教と人間科学」に分類されている。

以降の変化をざっと列挙すれば、

- ・94年に B. Lincoln が宗教学に加わり、試験問題から②の「未開」の領域が消える。96年には Ebersole が他大学に。97年に試験問題に④「HR への批判的アプローチ」が加わる。
- ・99年～01年にかけて宗教学では Smith が「儀礼理論を読む」という授業を開講。2001年から試験は①スペシャル・エリア②現代の理論③古典的理論のみになる。つまり、「比較研究」を強調しなくなる。教員も個別宗教史の専門家が増える。チベット仏教の専門である M. Kapstein、イスラムの専門である S. Mahmood である。Mahmood は 2003 年からインド密教専門の C. Wedemeyer に交代する。Doniger もまだ授業を出しているので、明らかに教員が南アジアとその周辺の専門家に偏っている。おそらくそのために、「宗教と文学」分野の教員、A. Yu が中国宗教史の授業を HR で開講したりしている。
- ・「宗教心理学・社会学」分野は心理学の教授が退職し Riesebrodt のみになり、心理学の授業が開講されない年が続いた後、2002年には分野名が「宗教人類学・社会学」に代わり、「心理学」分野は神学研究科全体から消滅した。
- ・2006年には、3つのコミティーは存続しているが、便覧での分野の掲載順をアルファベット順に変えた。「イスラム研究」が加わったので、計10分野、宗教人類学・社会学、聖書学、キリスト教史、ユダヤ教史、宗教学 HR、イスラム研究、宗教哲学、宗教と文学、宗教倫理、神学である。

【表8】3つの Committee と
9つの Areas of Study(1992)

「宗教の構成的 constructive な研究」
倫理学
宗教哲学
神学
「宗教伝統の歴史的研究」
聖書学
キリスト教史
ユダヤ教史
「宗教と人間科学」
宗教学 HR
宗教心理学・社会学
宗教と文学

3. 考察

以上をまとめて分析するならば、シカゴ宗教学において「宗教」の主要構成要素として「神話」と「儀礼」のセットが定着するのは、シカゴ学派の神話時代と呼ばれる 1960 年ではなく、Eliade の晩年、1970 年代末以降であった。疑いなく、それまでも神話も儀礼も「宗教学 HR」分野の授業では盛んに取り上げられていた。ところが、この 2 つの概念が突出していくのは、逆説的にも、シカゴ学派の祖とされる Wach の宗教現象学・解釈学的ジャーゴンが内部の教員にすら通じなくなり、「宗教現象」の代替概念が「宗教学」の研究対象を指し示すのに必要になったためだった。しかも、ただ言葉が入れ替わっただけではなく、「宗教現象は宗教体験の現れであり、それは超越に関わる」という、宗教とは何かを内包という点から説明する文章が消え、神話、儀礼、象徴、瞑想と、一見記述的な²⁸要素を挙げることで、宗教とは何かを外延という点から具象化するという方針が変わったのである。

70 年代末以降は、隣接分野である「宗教とパーソナリティ」が「宗教心理学」に変わり、「倫理と社会」が「宗教倫理学」と「宗教社会学」に分かれ、それぞれ専門化・理論化（脱実践化・脱臨床化）を強めた時期とも一致している。このため分野のすみ分けが明確化し、「宗教学 HR」の中心概念は神話と儀礼に絞り込まれていき、人類学のようになっていた。「宗教現象」という包括概念を使っていた時代には生じなかったことだが、要素を挙げるというスタイルに変わると、「宗教学 HR」分野ならではの対象を掲げる必要が生じ、「教義」「文学」といった要素が次第に後退し、「神話」「儀礼・実践」「未開」が前景化したのである。

しかし、「宗教学 HR」のアイデンティティが宗教人類学に一致したことはなかった。40～50 年代は、それは宗教を人類史というスパンでとらえる人文学であった。これは、隣接する宗教心理学・社会学が牧師と教会のためのアクチュアルな実践学であったのと対照をなしていた。60 年代には、世界史スケールで人類をとらえようとする、40～50 年代の人文主義再評価から発生した「社会思想」プログラムとは連携したが、人類学とは積極的な関係を築かなかった。これは「宗教学 HR」分野ではフィールドワークが課されないという点にも関わっている。Eliade がフィールドワークに基づき神話や儀礼を論じたわけではないことは言うまでもないが、彼のトップダウン的アプローチを批判した Smith もフィールドワークをしたことはない。神話はもちろん儀礼も、直接見に行くのではなく、エスノグラフィーや歴史資料といった文献＝テキストを読むというアプローチなのである。やはり人文的という形容が合う。

人類学との違いはまた、「他者学」ではないという表現でも説明できるかもしれない。筆者は、戦後の日本の宗教学において、新宗教研究が盛んになったのは、その担い手が研究者にとり、社会階級的な「他者」であったこと、それはちょうど欧米の宗教学（HR）が、ユダヤ・キリスト教以外の諸宗教をその対象としてきたことに対応すると論じたことがある²⁹。「他者」の異文化を理解することにより自文化を批判するという文化批判的役割が、どちらの宗教学にも存在したという意味であった。ところが、本稿で、シカゴ宗教学の便覧を分析した限りでは、この「他者学」や「異文化理解」の印象は非常に薄い。人文主義の 50 年代はもちろん、カウンターカルチャー期の 80 年代、90 年代になっても、人間の本性の理解、人類史の理解が分野の目的に掲げられている。「異文化理解により自分たちの見かたを相対化してみよう。他者を知ることで視野を広げよう」といった文言で分野の存在を正当化することは、どの時代にも行われなかったのである。

個々の教員の研究書をみれば、異文化理解や他者学の特徴が顕わなものもある。だが、それも丁寧に吟味する必要があるかもしれない。たとえば Long の *Significations* (出版は 1986 年だが、収録論文の多くは 1960 年代前後に書かれたもの) は、今ではポストコロニアル批評の先駆けと評価されている研究だが、文中の「other」が「非西洋社会の(西洋人にとっての)他者」にもなり「絶対他者(聖なるもの)の他者」にもなるのである³⁰。

Hart の宗教学制度史では、第 2 期の宗教学はプロテスタント中心、第 3 期には比較宗教、世界宗教史の科目が増えるとする。シカゴ宗教学は、いち早く、第 2 期から比較宗教、世界宗教史の授業を出していたように見えるが、便覧に明記されるような分野全体の理念のレベルでは、それはカウンターカルチュラルなものではなく、人間全体をとらえることを目指すものだった。「人間の理解」といっても、神学の「神の理解」に対して宗教学は「人間の理解」なのだ、つまり宗教を人間側から見るのだという意味ではなく³¹、人類を大きく本質的にとらえることが究極目標だという意味であった。

90 年代後半以降のシカゴ宗教学は、「比較」の看板をややひっこめ、教員も個別宗教史の専門家の集合体になっていく。2000 年代には「宗教人類学」の分野が他にできたこともあり、歴史的過去の宗教への比重が増している。3 つのコミティーのうち、2 番目の「宗教伝統の歴史的研究」の方に移しても支障は生じないのではと思うほどである。

さらに、現在は便覧の文面はまた一新され、「他者」を意識した記述になっている。しかも、それは次のように否定文で綴られている(抜粋かつ一部要約)。

HR は次のように主張する。

1. 西洋の唯一神教は、正統な *legitimate* 研究では唯一のパラダイムや対象であってはならない。
2. 宗教は信仰には還元できない(実践や制度、無意識の次元も含む)。
3. どのような宗教現象を対象とするときも、その解釈は、理想化された自己表象[その現象に対する当該宗教の内部の解釈]の批判的な研究を含む。

3 番目は、信者の言うことをそのまま受け取るなということ、やはり否定形である。他方、「神話、儀礼……」といった宗教の諸要素を挙げる文章は消えている。自省的意識が高じて、ついにこのような否定形でしか分野のアイデンティティを語れなくなったかのようである。

おわりに

シカゴ宗教学の「宗教」理解がアメリカ宗教学界に広がったのは、Eliade 等の研究の影響もあるだろうが、おそらく大きな原因として、育った院生たちが、60 年代後半から増加する州立大学に続々と就職し、そこの新設の宗教学科を担当していったということが考えられる。この検証には本稿では至らなかったが、シカゴ・スタイルについて論じた前述の N. Falk はまさにその例である。

最後に、再度 Hart によるマクロなアメリカ宗教学制度史と、シカゴ大学大学院神学研究科のミクロな制度的変化を比べてみよう。総合大学の学部で宗教学科でも、神学、聖書学、教会史とい

う従来のプロテスタントの神学部・セミナー方式の授業が行われていた第2期に、シカゴ宗教学はエスニック・マイノリティの教授を増やし、非西洋文化を対象とした多文化主義的な授業を展開していたように見える。だが、学内のカリキュラムを調べるならば、それは理念レベルでは人文的な総合的世界史の発想だった。あるいはこうも言えよう。90年代以降、シカゴ宗教学は、「宗教」に関して普遍主義である、本質主義であると外から強く批判されてきたが、それを宗教擁護だ、神学的だと決めつけるならば、批判する側が「宗教」概念にとらわれ過ぎているのかもしれない。それは人類史を大きく語ろうという第2期の志向性の現れでもあり、シカゴ大学では今日まで評価が高い「社会思想」プログラムと連動していたのだから。(イデオロギー批判をするには、その人文学と宗教を暗黙のうちに結び付けていた、大学全体を含む冷戦期のより大きな構図を問題にすべきだろう。³²⁾

他方、Hartが示す社会的・政治的コンテクストに、シカゴ宗教学は一方向的に規定されているわけでもないこともまた見えてきた。「神話と儀礼」の突出は、第3期のカウンターカルチャーの煽り、「未開」文化へのロマン主義的な憧憬がもたらしたのかということ、カリキュラム上はそうではなかった。便覧の紹介文を具体的にわかりやすくしたいとか、もともと交流があまりなかった、社会学系・心理学系の隣接分野が急に専門化したために、すみ分けの明確化を強いられたといった事情があったようだ³³⁾。

もちろん、便覧はあくまで一つの資料に過ぎず、その分野紹介文を、各時期の教員たちがどの程度熟考して書いていたのかは、いくらマニフェストや理念を重んじる国のことはいえ、全くわからない。その点で、本稿の分析は一定の限界を有するが、学説史をたどるだけではわからないことが、こうした資料から発見できることは確認できた。つまり、純学問的な理由だけでは、大学という組織の中の、学科や専攻としての「宗教学」の特色は形成されないのである。

近年、アメリカの大学の市場化、競争激化が問題化しているが、社会の要請に応えようという動きは、人文学の領域ですら早くから存在していた。特に、社会の要請を意識してカリキュラムを改革しようとする中でかえって社会性が減じるという逆説が、宗教学を含む文系学部では起こったのである。

本科研のように「宗教」概念の「地域性」に関する研究というと、国民性やその地域の主要な宗教伝統が、その地域の「宗教」のとらえかたに影響を与えているという発想に向かいがちかもしれない。だが、本稿の事例が示すのは、それは一面的な先入観であり、そのように見がちな宗教学者は、社会と大学のために良かれと思って邁進するうち、自分でも気づかぬ形で「宗教」概念を変え、それが後世に受け継がれるかもしれないという可能性である。

註

1 このほかに、「Best First Book in the History of Religions Award」という賞があるが、4部門の外に「history of religions」という呼称の宗教学が存在するという意味ではない。この賞は1891年にAmerican Council of Learned Societiesが創設したものであり、後にAARが受け継いだという経緯による。

2 http://www.aarweb.org/Programs/Awards/Book_Awards/rules-excellence.asp

- 3 tradition は伝承と訳すこともできるが、そうしても違和感はなくなる。
- 4 岸本英夫『宗教学』大明堂、1961年、54-55頁。
- 5 “Japan,” *Religious Studies: A Global View*, ed. by Gregory D. Alles, London: Routledge, 2008, pp.203-204.
- 6 “Subject Benchmark Statement for Theologies and Religious Studies,” The Quality Assurance Agency for Higher Education, 2007, p.1.
- 7 *Ibid.*, p.7.
- 8 書評類を除く。論文では3件ということだが、いずれも Taylor が主題ではない。
- 9 これは、AAR の人数上の多数派がこのような人たちだという意味ではない。
- 10 他には、David Frankfurter はプリンストン大出身、Amira Mittermaier はコロンビア大(人類学)出身、Susan Harding は大学は不明だが人類学出身である。
- 11 tradition の方はハーバード大学 (W. Cantwell Smith) を連想させる。
- 12 「「宗教」概念批判以前一以降にみられる北米宗教学の連続性」2003~2005年度科学研究費補助金(基盤研究(B))成果報告書『現代世界における「宗教」研究の新動向をめぐる調査および検討』(代表者:鶴岡賀雄)、2006年。
- 13 Charles H. Long, “A Look at the Chicago Tradition in the History of Religions: Retrospect and Future,” *The History of Religions: Retrospect and Prospect*, ed. by Joseph M. Kitagawa, 1985, p.87.
- 14 リチャード・ガードナー「解説 ヴァッハの学問とシカゴ学派宗教学」ヨワヒム・ヴァッハ『宗教の比較研究』(渡辺・保呂・奥山訳)、法蔵館、1999年、256頁。
- 15 これからのシカゴ宗教学の担い手となる C. Wedemeyer もこのようにシカゴの伝統をとらえている(2012年11月17日筆者によるインタビュー)。
- 16 D. G. Hart, *The University Gets Religion: Religious Studies in American Higher Education*, Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1999, p.10.
- 17 *Ibid.*, p.64. 厳密には、科学的(実証的な歴史学等)な方法を取り入れたといっても、宗教団体との関係が消滅したわけではなかった。比較宗教学は、キリスト教が諸宗教の頂点にあることを証明することを期待されていただけでなく、宗教の普遍の本質を探究することにより、リベラル・プロテスタントのエキュメニカルな関心に応えていた。教派ごとに分裂し、教派のドグマ上の個別性に拘泥し、来世志向的な特色を持つ従来の神学は、もはや社会—アメリカとして統合し、発展すべき社会—の役に立たないとみなされたのである。*Ibid.*, p.65.
- 18 *Ibid.*, p.23-65.
- 19 *Ibid.*, p.95, 105-111.
- 20 *Ibid.*, pp.148-150.
- 21 現在では、公立大学で宗教学科があるのは大体半程度とされている。Michael D. Waggoner, “Sacred and Secular Tensions in Contemporary Higher Education,” *Sacred and Secular Tensions in Higher Education: Connecting Parallel Universities*, ed. by M. D. Waggoner, New York: Routledge, 2011, p. 3.
- 22 *Ibid.*, pp.200-208, 227, 231-232.
- 23 1958年の学生用便覧(Announcements)による。
- 24 Hart, *op. cit.*, p.52.
- 25 以下、一つひとつ註を設けていないが、1940年代から2012年現在までの The Divinity School Announcements (ほぼ毎年発行される学生用便覧)を参照した。
- 26 もっとも、これに先立ち Haydon は、“From Comparative Religion to History of Religions”という論文を発表している。この場合の HR とは、実証的歴史学を意味した。A. Eustace Haydon, “From Comparative Religion to History of Religions,” *The Journal of Religion*, 2, no. 6, 1922.
さらに言えば、表3のように、Wach は授業タイトルに HR も sciences of religions (Religionswissenschaft の直訳)も study of religion も併用している。理由は不明。
- 27 ただし、これらの教授の中には、正式な所属はシカゴ大学に隣接するセミナーである者もいた。たとえば前述の Kincheloe は Chicago Theological Seminary から教えに来ていた。シカゴ大学大学院神学研究科と近隣のセミナーの教員は、Federated Theological Faculty of the University of Chicago を1942年から構成し、神学研究科の授業を合同で担当していた。その区別は便覧の教員一覧にはない。

-
- 28 「記述的な」としたのは、単にそれぞれの要素に何も説明がなく、ただ列挙されているからだが、もちろんなぜこれらの要素が抽出され、並列的に置かれるのかは「記述」の域を超えている。
- 29 “Japan,” *Religious Studies*, p.203.
- 30 Charles H. Long, *Significations: Signs, Symbols and Images in the Interpretation of Religion*, Philadelphia: Fortress Press, 1986.
- 31 2013年現在の便覧の文面はこの意味で「人間の現象」という言葉が使われている。
- 32 そのような御用学的な人文学を克服する人文学を目指し、Smithは1973年にシカゴ大学の学部で「Religion and the Humanities」というプログラムを新設した。J. Z. Smith, *Relating Religion: Essays in the Study of Religion*, Chicago: University of Chicago Press, 2004, p.12, 42.
- 33 しかし同時に、「神話と儀礼」の二分法については、シカゴ内部から批判的理論研究が行われてきたことも見落としてはならない。たとえばSmithが*To Take Place*で論じたことはその代表である。紙幅が尽きたので、彼の理論をごく短く紹介するに留める。

従来の宗教学者は、神話／儀礼をセットとしてとらえ、(近代主義・科学主義に抗して)神話が虚偽ではないことを証明することに専念してきた(それが証明できれば、儀礼の地位も自動的に回復すると考えた)が、実際のところ、宗教学での神話の扱いと儀礼の扱いは対照的といえるほど異なる。神話は「中身」がある(だから「虚偽」にもなりうるし、「意味」を解説する対象にもなる)が、儀礼は「空虚」とされ、**explain away**されてきたのである。

この儀礼軽視は、プロテスタント的宗教観が支配的だったためだが、最近の宗教学における儀礼の復権にも問題がある。すなわち、行為のカテゴリーを、合理性や言語に先行させればよいという主張(「はじめに行為ありき」)が見られるが、これは古い神話／儀礼の二分法を裏返しただけである。(先行研究への批判部分を筆者が要約した)

Smith自身は、儀礼の「空虚」さをむしろその特徴とした上で、儀礼を意味内容とは無関係の「しるしづけ」の行為として積極的に解釈しなおしている。

J. Z. Smith, *To Take Place: Toward Theory in Ritual*, Chicago: University of Chicago Press, 1987, pp.101-104.

つけ加えれば、50～60年代の人文的なシカゴ宗教学が、果たして宗教のリアルな社会面を捨象していたのかというと、最近のLongの論考によれば、当時、彼には社会学のシカゴ学派に対する対抗意識があったとされている。シカゴ社会学では南部から都市部に移住してきたアフリカ系アメリカ人の調査を行ったが(調査した社会学者の中にはアフリカ系の者もいた)、その際、彼らの宗教は、都市への適応を妨げる無駄なものとしてしか見なされなかったというのである。それに対抗したのが神学研究科の自分たちだと彼は回顧している。このように文字の形では残されなかった力学は、他にも存在するのだろう。

Charles H. Long, “Religion, Discourse, and Hermeneutics: New Approaches in the Study of Religion,” ed. by M. E. Courville, *The Next Step in Studying Religion: A Graduate Student’s Guide*, New York: Continuum, 2007.